

の行脚姿の写真を見ても、それを感じせしめられる。

窮みなき法悦にうるんでいる瞳、ほほの輝き、何れからともなく感ぜしめられる清純さ、健かさ、美しさ私は君を思うとき、それが儼にくつきり浮ぶ。

私は禮仰しつつ、心香をささげている。

### 桑山君の姿に憶ふ

文學部長・教授 岩井大慧

二十八年の春、私は法事があつて函館に渡りました。ところがどういふ廻り合せか、往きも復りも洞爺丸に乗つたのでした。それで今度の惨事が傳へられると、何といふことなしに、異状な關心をもち「あの船がね！」と吃驚すると同時に、何とも言へぬいやな氣持がしました。その一方船そのものについて言ひ知れぬ愛惜の念が起り、そして誰も知人の乗つてゐないことを祈つたのでした。ところが事もあらうに、その遭難者中に、その二十八年の卒業生で、而も私ども史學科生だつた桑山君が、颱風の犠牲となつてゐたと聞いて、再び呆然として了ひました。何といふ悪い廻り合せであつたのでせう。靜かに眼をつむつて冥福を祈ると、私の腦裡に洞爺丸のあちこちの場所が浮び、そしてそこに桑山君の青く剃つた頭の姿が現はれて來ました。私はここに拙い一首を君の靈に捧げることになりました。

### 北海の渡島フシマのみなみ七飯濱ナナエ

われ泣きくれて君をしぞ憶ふ

### あした來る人

文學部教授 佐藤堅司

洞爺丸の遭難者のなかに、桑山君の名を見出したとき、私の胸はつぶれた。そうして、その悲しみのためにふさがる儼のなかに浮んだのは、在りし日の桑山君の面影である。駒澤大學での桑山君と私の交渉は僅かに一年間だつたが、二人は性格的にウマがあつたとしてもいふのか、研究室や圖書館や見學旅行やいろいろの機會に、よく問答しあつたものである。桑山君は私に随分多くの質問をした。その全部をいま私は覚えてゐるわけではないが、不思議にも忘れられない問答が三つ四つある。研究室での一遍上人論と妙好人論、圖書館の一隅での傳授に關する問答、鎌倉での神社建築に關する問答がそれである。

私は桑山君の性格を井上靖氏の『あした來る人』(朝日新聞掲載)と結びつけてみた。この小説は、「ウマがあうかわないか。」を主題としていたからである。その主人公は、男女四人で、いずれも好感のもてる人物なのだ。彼等は「みんな缺點はあるが、……純粹なものがある。その純粹なもののために、みんな傷ついたり回り道をしたりしている。……併し、やがて、彼等は完全な人間として、あした來るだろう。」と、作者から評されている。桑山君も、「あした來る人」の部類に屬する人だつた。然るにその桑山君は、「あした來る人」になつてしまつた。まことに悲しいことである。

函館の海に沈みてわが友はあした來まさぬ人となりけり  
悲しやなこれを運命さだめといふべきかひとり身に於てゆける君はも